

共同研究の経過と概要

松尾恒一

I 研究目的

わが国の宗教者として、全国広くに見られるのは、神社祭祀を司る神職と、寺院を拠点として葬送儀礼や祖霊供養等に従事する僧侶であるが、この他に、地域に固有の宗教者が共同体や個人のために祈願を行ってきた。東北地方のイタコ・ゴミノ、富士や伊勢の信仰圏で活動した御師、四国の太夫、奄美・沖縄地方のノロ・ユタ、及び各地の巫女や山伏・禰宜らであるが、本共同研究においては、これら前近代より活動してきた民俗的な性格の強い宗教者を研究の主たる対象とする。

近代において、その研究の出発となったのは、民俗学の黎明期、柳田國男の職能・芸能民についての諸論考である。「妹の力」〔民族〕昭和二年三月、「巫女考」〔郷土研究〕大正二年三月〜三年二月、「毛坊主考」〔郷土研究〕大正二年三月〜三年二月、「俗聖沿革史」〔中央仏教〕大正十年一月〜五月)、等、大正〜昭和初期の一連の論考で、口寄せをする巫女のほか、芸能との関わりも深い漂泊・遊行民や被差別民の祈禱や芸能、工芸等の職能、被差別の歴史や社会背景について、多くの事例を引いて語っている。また、その後昭和十七年(一九四二)の『日本の祭』(弘

文堂)においては、村落において、職業神主が成立してゆく前段階として、神事舞や祈禱を行った舞太夫等について触れている。

同時代に、こうした領域に関して大きな寄与をした学者に喜田貞吉〔つるめそ(犬神人)考〕『社会史研究』九巻四号〜六号、大正十二年(一九二三)、等)や、中山太郎などがいる〔日本巫女史』大岡山書店、昭和五年、『日本盲人史』成光館、昭和十二年、等)。特に柳田と喜田との間には、シユク(夙・宿)やオシラ神など個別の問題についての論争も繰り広げられ、親交もあったが、柳田の研究は彼らが訪れ、時にある者たちは定住した村落からの視点も持ち合わせていた点に、その立場がよく現われている。

戦後こうした、遊行民、漂泊民、被差別民等の研究は、堀一郎・佐々木宏幹・宮家準ら宗教学・人類学に近い研究者による研究、歴史学においては、女性史・部落史・地方史等、民衆史の立場からの芸能史を唱えた林屋辰三郎やその門弟たちの研究により大きく進展し、この十年では、近世史の立場からの「身分的周縁」の関心より、高埜利彦・横田冬彦をはじめとする研究者により活発な研究が進められ、体系化も試みられている(高埜利彦・横田冬彦他編『近世の身分的周縁』全三六巻、吉川弘文館、

平成十九年(二〇〇七)、等)。

柳田・折口の関心・研究をより直接に継承する立場としては、福田見ら伝承文学を標榜する研究者のほか、砂川博・兵藤裕己ら国文学からの研究、特に職能・芸能民研究に照射してその可能性を探索しようとした赤坂憲雄の研究〔『漂泊の精神史―柳田国男の発生』小学館、一九九四年〕などがある。

民俗学においては、萩原龍夫、桜井徳太郎ら民間信仰・民俗宗教を専門とする研究者によって推進されたものの、全体としては、中心的な課題となることはなかった。これは柳田の研究対象が、その中・後期以降、村落において住民の大部分を占める「極く普通の百姓」である「常民」へと移っていったことと深く関係している。戦後、県、市町村の自治体誌の編纂においては、民俗調査団が編成され、独立した民俗編の刊行も通常のこととなり、その多くに民俗学研究者が執筆、編纂に関与しているが、その民俗編に、町村を去来する(した)職能民やその職能が項目として立てられることは極めて少ない。

ところで、これらの宗教者の祈禱のための諸儀礼は、芸能としての性格をあわせもつものが多い。芸能とは一口で言えば、歌舞・言語・器楽等によって行われる身体・音声の表現である。祭祀の場とは、共同体が(宗教者を介して)神仏に祈願を行う空間であるが、芸能は、ある場合には神仏に捧げられる供物となり、またある場合には、降臨した神仏が意志を示す表現として演じられた。本共同研究は、宗教者・芸能者による儀礼や芸能が、共同体の秩序維持を目的とする祭祀においていかなる意義を有していたか、また神・仏・精霊と交感し得ると考えられている宗教者・芸能者の能力や世界観と、これが社会に受容され、必要とされた環境・背景等の実態と特質を追求することにある。

研究が細分化しつつある状況にある中で、個々の事例については深化を見ているが、列島の各地に伝承されてきた諸例について、それぞれ先

端の研究成果を踏まえ、近現代への伝承、変容と、その淵源と見做される中・近世期の実態について、民俗学・歴史学、両研究者の協業によって追求することが、本共同研究の目的である。

II 研究組織

赤嶺政信 琉球大学 法文学部 本館客員教授(二〇〇三年度)

梅野光興 高知県立歴史民俗資料館

神田より子 敬和学園大学 国際文化学科

林 淳 愛知学院大学 文学部

福持昌之 愛知川町教育委員会町史編纂室

堀内 眞 富士吉田歴史民俗資料館

松村和歌子 春日大社

渡辺伸夫 昭和女子大学 文学部

上野和男 国立歴史民俗博物館 研究部

内田順子 国立歴史民俗博物館 研究部

小池淳一 国立歴史民俗博物館 研究部

常光 徹 国立歴史民俗博物館 研究部

松尾恒一 国立歴史民俗博物館 研究部

〔ゲストスピーカー〕

井上隆弘 民俗芸能学会会員

川崎史人 昭和女子大学中高部

菊池邦彦 東京都立航空工業高等専門学校

森本仙助 奈良県立民俗博物館

III 経過

〔平成十五年度〕

◇第1回研究会 八月九日 国立歴史民俗博物館

本共同研究における各分担者の研究の構想、研究史と現在の課題

◇第2回 九月二十七日～二十八日 国立歴史民俗博物館

堀内眞 「富士講成立以前の富士信仰」

松村和歌子 「御神木榊にまつわる春日祠官の儀礼」

林淳 「神事舞太夫と梓神子」

渡辺伸夫 「対馬の神子と法者の儀礼」

◇第3回 一月二十四日～二十五日 国立歴史民俗博物館

赤嶺政信 「沖繩の村落祭祀とシヤーマニズム」

神田より子 「修験道所属神子の儀礼と身体観」

〔平成十六年度〕

◇第1回 七月二十八～二十九日 国立歴史民俗博物館

梅野光興 「いざなぎ流、弓折袴と四季の歌」

松尾恒一 「報告、いざなぎ流の文献資料、明治～昭和期」

松村和歌子 「春日における祓と春日社神人」

◇第2回 一月二十三日～二十四日

小池淳一 「高知県本川神楽の呪法と系譜」

松尾恒一 「調査報告、いざなぎ流取り上げ神楽」

福持昌之 「奴振りの芸能の身体と社会」

◇第3回 二月二十三日～二十五日 於琉球大学

赤嶺正信 「イザイホー再考」

〔平成十七年度〕

◇第1回 七月二十四日

澤井真代 「来訪神のこぼを聴くことの働き―石垣島川平マユ

ンガナシ儀礼」

内田順子 「伝承と身体―見える他者とする他者―」

川崎史人 「現代を生きるネーシー島と都会の狭間で―」

◇第2回 十月一日

常光徹 「後手の呪法―富山県下村・賀茂神社の御田植祭の事例から―」

越智三和 「伊予神楽の資料と現在」

堀内眞 「富士講と「御伝」、登拝」

大東敬明 「南都寺院における中臣祓」

森本仙助 「春日における祓実践と神道研究」

◇第3回 一月二十三日～二十四日

菊池邦彦 「富士講―庚申延年に関わる歴史と資料を中心として」

井上隆弘 「三信遠における死霊祭儀と身体」

◇第4回 二月四日～六日 岩手県宮古

神田より子 「岩手県宮古、黒森神楽の歴史と現在」

IV 成果

1. 近世・近代の変容と現代

本共同研究は、列島諸地域における民間宗教者について、民俗学と歴史学との先端の研究を踏まえながら、両研究者の協業によって追求することを目的とするもので、東北の巫女・修験、富士吉田の御師、春日の巫女・神人、四国の太夫（高知のいざなぎ流、愛媛の太夫・巫女）、対馬の法者、沖繩・奄美地方のノロ、及び、近世期の神事舞太夫を対象として、それぞれ専門的分担者により研究発表を行った。

成果としてまず挙げられるのは、南西諸島を除いた列島の全域で、程度の差はあれ、近世期の吉田家・白川家による神道化の中で、大きな変化、変容を経て、現在へと続いてきた点が浮き彫りにされた点である。

たとえば、富士吉田の御師の場合、その起源は中世に遡り、密教・修験的な祈禱を行っていた僧体の宗教者であったが、近世中期までに、有髪的神官装束といった姿に変化し、現代に続く御師の表象がこの時期に確立したことが明らかにされた。近世期に、神事舞太夫なる芸能民的な

宗教者が、神職と競合する祈禱を行ったことなども明らかにされたが、これも神道が次第に優勢となる近世期の状況を示すものといえる。

高知県物部地域のいざなぎ流が顕著な例であるが、僧侶や神職の少ない地域においては、氏神や家の神祭祀を行うと同時に、病人祈禱など、疫神・動物霊・樹木霊に関わる祈禱を行い、さらに葬送儀礼等、死霊・祖霊の祭祀にも関与する、といった地域の民間宗教者の姿も鮮明になり、今後、環境との関係性において神霊観念や祭儀の空間認識の究明へと進む必要性が認識された。

南西諸島の例としては、沖縄久高島を拠点として活動するノロについて、特に神女へと就任する祭儀であるイザイホーについての考察が行われた。従来、地域的な民間宗教者の民俗行事としてもっぱら理解されてきたイザイホー行事が、かつては琉球王府の国王の儀礼とも関係を有する国家儀礼であったことが綿密な考証によって明らかにされた。

悪石島のネーシは、琉球地方と本土との中間的な性格を有する女性宗教者であるが、大阪への転居と帰島といった現代的な状況におかれるネーシについて考察が行われ、宗教者としていかに現代を生きているかといった問題が論じられた。

2. 地域と民間宗教者

民間宗教者とその祭儀・祈禱を受容する地域の人々とのかわりについて、主に民俗を専門とする分担者による、実践のレベルでの議論を行い、考察を深化することができたことも、大きな成果であった。

富士吉田の御師の祈禱における重要な唱えごと「お伝え」は、一方で、講の人々も所持する例を多く確認することができるが、御師が布施・金員等を受けて少しずつ段階的に伝えてゆく実態や、御師段階では、冊子・卷子形態のものであったものが、祈禱の場における便宜より折本に変わってゆくことなど、宗教者より地域へ伝承されてゆく際の変化―

民俗としての変容の実相が明らかにされた。

富士講は、富士吉田周辺のみならず、関東・中部地域まで広くに分布するが、地域ごとの差異も顕著に見られる。講の形態をとらない地域においても、富士信仰に基づく祭儀が見られる。たとえば、千葉県八日市場地域では、七歳の儀礼で麻が用いられるが、これは富士袈裟を起源とする認められるもので、講以前の富士信仰のあり方を示すものと推測され、諸事例を集積することによって、講が形成される以前の富士信仰受容の実態を解明する可能性が示された。

奈良春日社の神人は、春日社の諸祭儀における上級神官の補佐的な仕事を本務とし、依り代としての神を立てることを職務としたが、春日山の神を切り取り、立てることは単なる宗教的な行為ではなく、春日社神人の特権であり、春日の権威の表象でもあったことが明らかにされた。

春日神人は一方、地域においては祓を主とする祈禱を行っていたが、その祓は、純粹に神道的なものではなく両部神道的な性格を有するものであった。棚状の祭壇を作り、御幣を並べ、日・月を祀る陰陽道的な祭祀を行っていた実態も明らかにされた。

両部神道の研究はこの二十一年間で急速な進展を遂げたが、その研究は現在なお思想史研究が主流であり、その実践としての研究はほとんど見られない。本共同研究では、東大寺修二会における密教的な作法を行う大中臣祓等について分析が行われ、それが両部神道的な性格を有するものであることが明らかにされた。民間の神楽等にも両部的な要素が指摘できる例があり、今後、両部神道の民間宗教へ与えた影響、その実践が解明されることが期待される。

奴振りは、近世期の大名行列の祭儀を構成する重要な見世物で、大名という支配階層と奴振りという職能民の身分の関係性が問題となるが、近代には葬祭業者によって継承されてゆくことが実証され、歴史文献、伝承をあわせて研究することの重要性が再認識された。

3. 祭儀と身体、神楽と死霊祭祀

高知県東部の山間地域に現在に伝承される民間宗教いざなぎ流は、かつて託宣をともなう病人祈禱としての弓祈禱が行われていたが、本作法について、文献と現在に伝承される祈禱の分析より復元的に実態を解明し、神霊と交流する身体の研究として、託宣の祭儀とその意義について考察された。

先行研究の少ない本川神楽や伊予神楽、及び、九州の対馬における法者について、中・近世期の文献と現行の伝承を資料として、その宗教世界の全容解明を目標とする考察が行われ、近世・近代における神道の影響のほか、死霊祭祀の実態が明らかにされた。

また、霜月神楽を伝承する静岡県水窪地域において、神楽を司る民間宗教者たる禰宜について、特にその死霊が恐れられ、入念な祭祀が行われる伝承も紹介され、共同体における宗教者の存在を考える上での新たな視座の必要性が認識された。

なお、三信遠地域の花祭りでは、かつて浄土に見立てた「白山」での擬死再生の儀礼が行われたことはよく知られるが、密教をベースに浄土思想・信仰が影響し、両者が融合した独特な祭儀であったことが近年明らかにされている。

いざなぎ流では、神社祭祀において大夫の霊に対する祭儀が執行されるし、また、大夫の死霊を家の守護神へと転じる祭儀（取り上げ神楽）が現在なお行われている。

本共同研究における岩手県黒森神楽の共同調査では、神楽としての墓前における獅子舞や、家の祭壇の位牌の前での奏演等、祖霊供養の神楽の実際を目にすることができたが、神楽と死霊祭祀の実践について、列島諸地域の諸事例をさらに集積し、分析する必要性がある。

民間宗教者を主題とする研究ではないものの、異界の神霊と交感する呪法である「後ろ手」についての分析も大きな成果であったといえる。

節分の豆を拾った後に、穴開き銭とともに紙に包んで、体をさすった後に肩越しに投げる、といった民俗について考察が行われた。辻・軒とといった生活空間が、異界と現実世界との境界と認識されたことは民俗学における通説ともいえるが、さらに、異界へと働きかける身体所作があったことが明らかにされたのである。

加えて特筆されるのは、かつてこれを女中が袖で受け四辻に捨て、さらに拾う拾い屋がいた、という指摘である。「肩越しに投げる」作法は、穢れの除去を目的とするものであるが、共同体外への排出が、「家族↓女中の袖↓四辻↓拾い屋」というように、身分制という穢れ観念に基づく身体認識の中で実践されていたことの指摘は大きな成果といえる。

(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)